

平成22年度特別展 江戸時代の絵図

期間 平成22年10月30日(土)
～
平成22年12月26日(日)

休館日 11月 1・4・8・15・22・24・29日
12月 6・13・20・24日

宮代町郷土資料館

〒345-0817

埼玉県南埼玉郡宮代町字西原289

TEL 0480-34-8882 FAX 0480-32-5601

開催にあたって

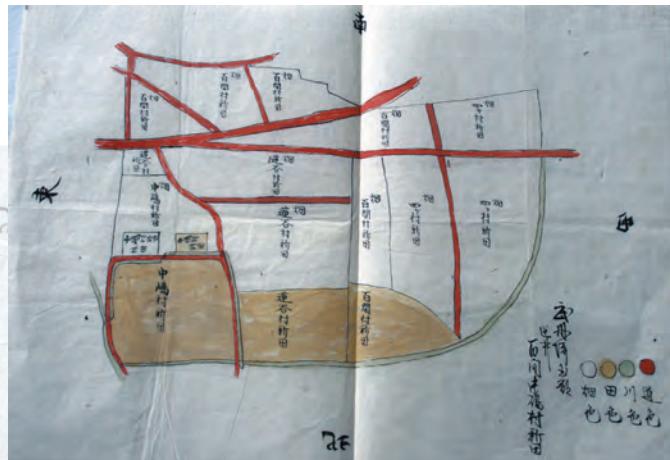
宮代町には旧百間地区を中心に数多くの絵図が残されています。この中には岩槻城絵図や用排水関係の絵図、幸手領の絵図、百間村絵図などがあり、大きいものは3m弱四方にもなるものもあります。今まで、宮代町郷土資料館では一部の絵図について公開をしてきましたが、今回の展示では幸手領絵図と百間三ヶ村絵図（百間村・須賀村）について初公開をいたします。どちらも2m50cmを超える大きな絵図で、幸手領絵図は鷺宮・栗橋から幸手・杉戸・小渕（春日部市）にかけての範囲が、百間三ヶ村絵図では、旗本池田氏の領地であった百間中村、百間中島村、百間須賀村を中心に描かれています。この他にも、多数の絵図や絵図のパネルを展示いたします。

絵図は、江戸時代の宮代町を視覚から再現することができます。この機会に宮代町の先人が残した絵図を頼りに昔の宮代町に思いを馳せて見てはいかがでしょうか。

最後になりましたが、展示の開催にあたり快く資料をご提供頂きました皆様、並びにご指導、ご協力頂きました関係各位に心より感謝いたします。

平成 22 年 10 月 30 日

宮代町郷土資料館



逆井百間中島村新田絵図（岩崎俊男家文書）

凡例

1. 本書は平成 22 年 10 月 30 日から 12 月 26 日にかけて開催する宮代町郷土資料館特別展「江戸時代の絵図」の展示図録です。
2. 本書並びに展示した写真は、当館学芸員河井伸一が撮影しました。
3. 本展示会の企画及び執筆・編集は河井伸一が担当しました。展示は資料館職員等が協力して行いました。
4. 資料提供・協力者等（順不同・敬称略）
(独) 東京国立博物館、埼玉県立歴史と民俗の博物館、宮代町産業建設課、岩崎光子、折原静佑、関根孝吉、戸田義一、小島雅郎、西光院、林貴史

江戸時代の絵図

絵図とは現代でいう地図のことで古地図と同様なものです。古くは荘園絵図など平安・鎌倉時代からありますが、一般的には江戸時代に入ってから多数描かれたようです。絵図には、国絵図や城絵図、村絵図のほか、街道絵図や寺社絵図、願書きに付属する絵図や裁許に付属する絵図、水利関係絵図、郡絵図、領絵図などがありますが、最も多く残されているのは村絵図でしょう。宮代町にもたくさんの村絵図が残されています。

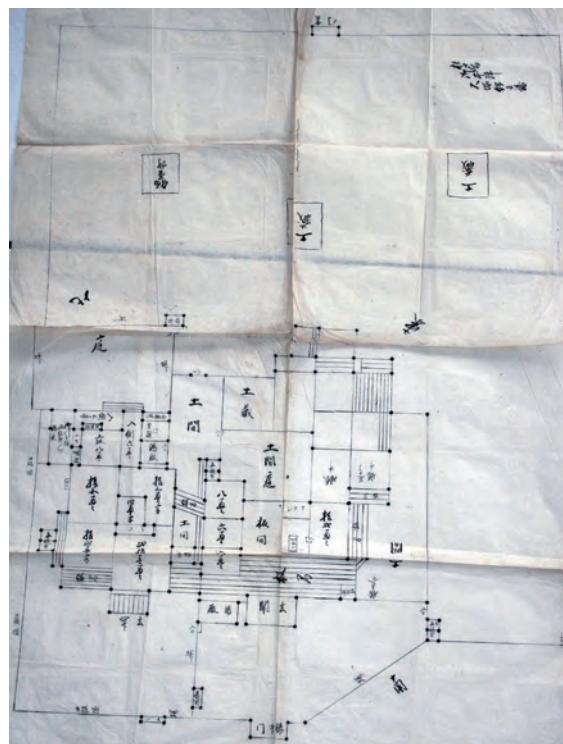
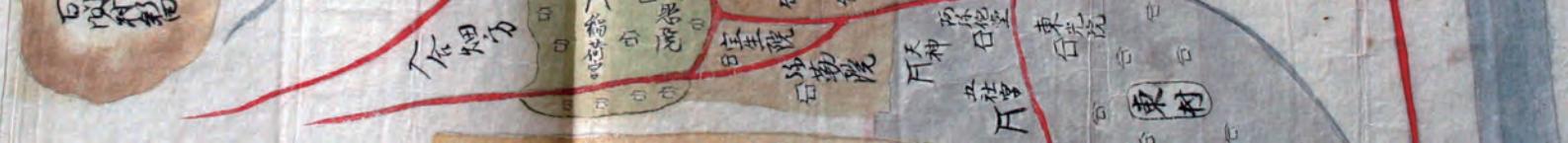


武藏国図（部分）折原静佑家文書

緑が葛飾郡を、白が埼玉郡を、黄色が足立郡を示します。東、中、百間、ハス谷、スカ、クメハラ、和ト、国納（いずれも宮代町）の地名を確認することができます。

岩槻城絵図（部分）関根孝吉家文書

この岩槻城絵図は内容等から元禄10年（1697）から正徳元年（1711）に書かれたものと推定されます。江戸時代中期のものとしては唯一のものです。二ノ丸に城主の居宅があり、本丸には先年まで御成御殿があつたと記されています。



杉戸宿本陣絵図 関根孝吉家文書

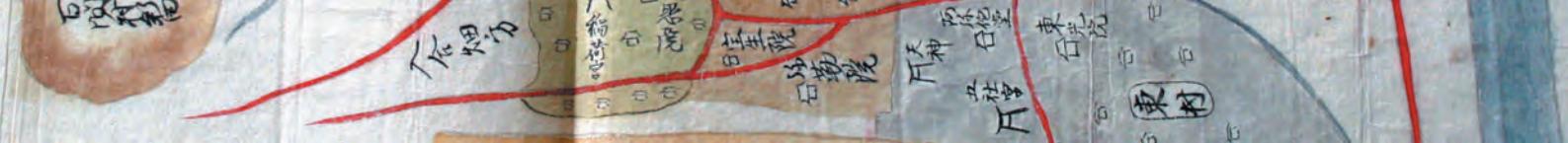
杉戸宿御本陣大塚伊兵衛と記されています。杉戸宿本陣は江戸時代後期以降は長瀬家が勤めますので、それ以前の本陣であったと推定されます。



上 埼玉郡絵図部分 百間周辺

右上 埼玉郡絵図 折原静佑家文書

埼玉郡は東側に古利根川、西側に綾瀬川、北側に利根川で囲まれた範囲です。町場として騎西、久喜、柏原、大沢・越谷、城下町として忍、岩槻、羽生古城が記されています。百間中村が西村と記載されていることから、江戸時代後期以前の埼玉郡絵図と推定されます。



幸手領絵図 小島雅郎家文書

幸手領とは幸手市付近のみと思われますが、北は鷺宮・栗橋（いずれも久喜市）から幸手、杉戸、小渕（春日部市）までの範囲で、戦国時代古河公方の家臣であった幸手一色氏と関係の深い地域と言われています。

この絵図は延宝年間（1673～1681）に作製された絵図を明治4年（1871）に写したと記されています。しかし、江戸時代前期の情報がよく残されています。

幸手領は東側を江戸川・庄内古川、北側を島川・権現堂川、西側を古利根川で画されていますが、南側については明瞭な境は確認できません。しかし、元々は庄内古川が八丁目、樋籠（いずれも春日部市）付近で古利根川に流れ込むことで画されていたと推定されます。

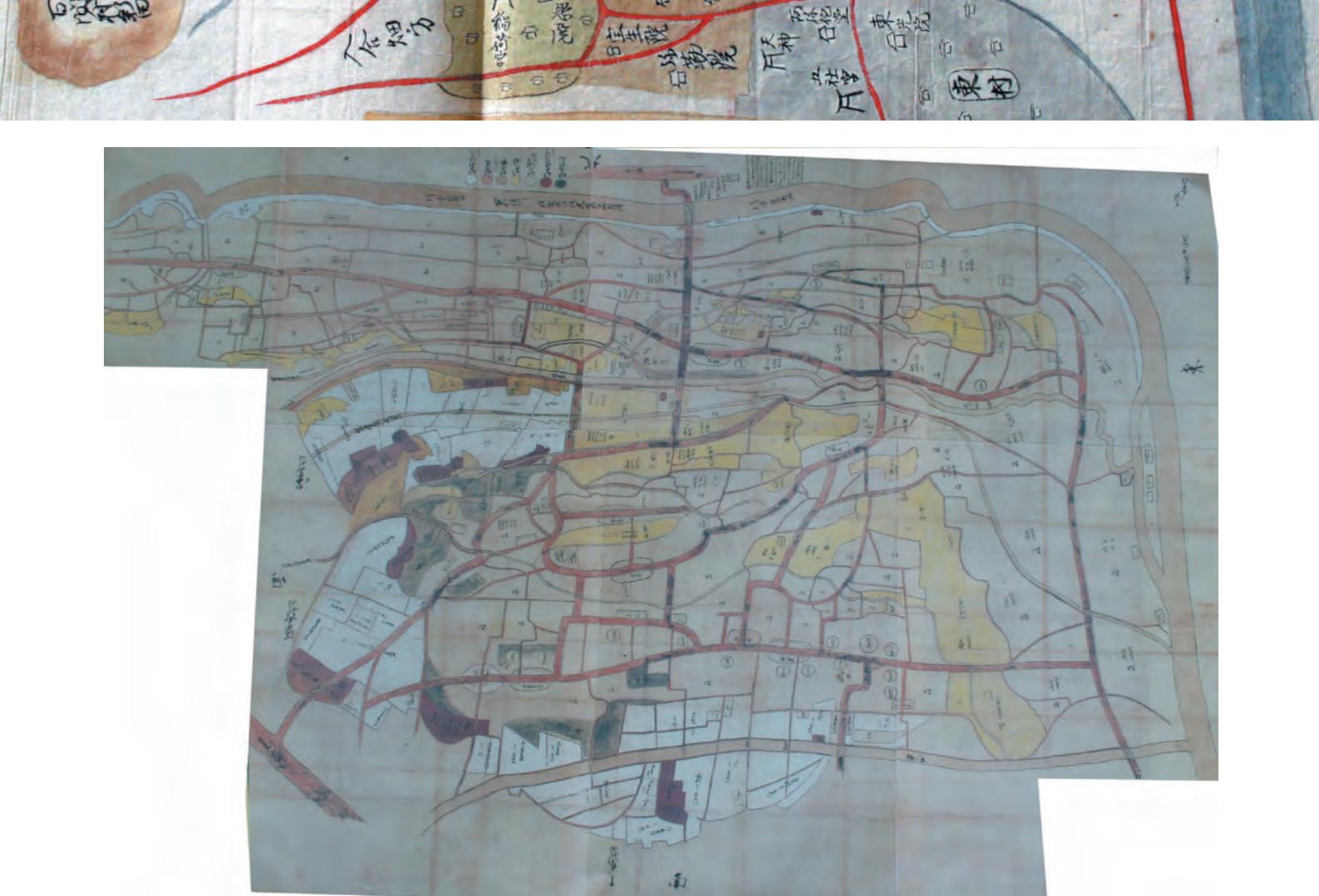
ここでは、宿場や農村の一部について細かく見てみたいと思います。幸手宿は田宮町と記され宿場の家並みが描かれ北側の枡形も確認できます。その西側には牛村と記されている場所がありますが、ここは幸手城の跡で周囲が堀で囲まれていることが分かります。この頃までは城郭の一部が残っていたのでしょうか。

八甫村（久喜市）の北側には羽生領悪水落堀と記される旧利根川

の島川が描かれています。中央付近の平須賀（幸手市）付近には旧利根川の廃川が確認できます。

杉戸宿では新海道から繋がる北側の枡形（横町）が確認できますが、古来の日光海道と伝えられる上杉戸、下高野（いずれも杉戸町）方面への道も断続的ながら確認できます。北東側には後の大島新田である安戸沼も記載されています。

大輪（久喜市）付近や下高野付近には林が描かれ御林があったことが分かります。いずれも砂丘地帯であることは興味深いと言えます。



百間三ヶ村絵図 岩崎俊男家文書

この絵図は宝暦 14 年 (1764) に百間中島村の名主九郎兵衛により作成されたものです。百間 7ヶ村（百間本村、百間西原組、百間金谷原組、百間東村、百間中村、百間中島村、蓮谷村）と須賀村を合わせた範囲の絵図ですが、内容等から百間中島村と百間中村（以前は百間西村）、須賀村（百間須賀村ともいう）を中心とした絵図であることが分かります。この 3ヶ村はいずれも旗本池田氏の知行地で、一体的に把握されており、百間三ヶ村と呼ばれていました。

絵図の内容は白色が新田を、黄色が田地を、薄茶色が畠地や屋敷地を、小豆色が山林や秣場を表します。畠が非常に多いことが分かります。新田は南側に下ノ谷新田、その北に逆井新田、その北に笠原沼新田が確認できます。この段階では逆井新田の西側の百間四力村請新田が秣場となっています。古利根川の縁辺にも流作場新田があります。古利根川には「戌年の出水以後騎西領大落堀の名目となった」と記されており、寛保 2 年 (1742) の水害で騎西領の排水堀となったことが分かります。一方、清地橋は「古来 11 間の長さで幸手領組合、百間領組合で 5 間半ずつ負担していたが、御普請願に伴う幕府役人の巡検・吟味の結果、橋中央部 2 間を百間村が負担することとなり、橋の長さが 13 間となった」と記されています。清地橋から杉戸宿へはクランク（桟形）を通らないと宿場に入ることは出来ませんでした。他には古利根川の下流の中洲島（川端）付近では古利根川が東西 2 筋に分かれていることが確認できます。後に西側の河川は廃川となり新田となりました。この他、西原付近では「中島村分新屋敷」があり、元和 5 年 (1619) に検地を行うことが出来ない場所であったことが分かります。また、笠原沼東側の小沼に掛渡井があったことや西光院に多くの塔頭があることが分かります。

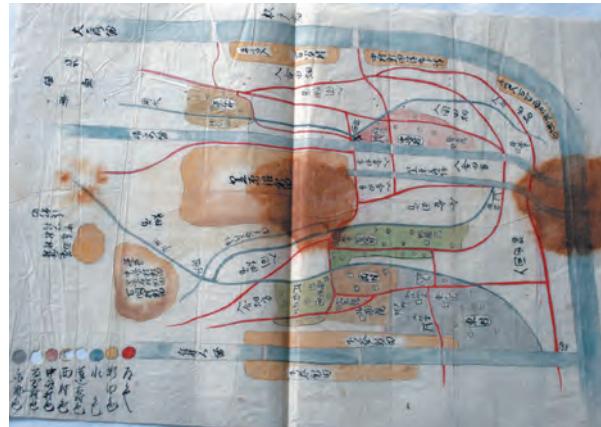
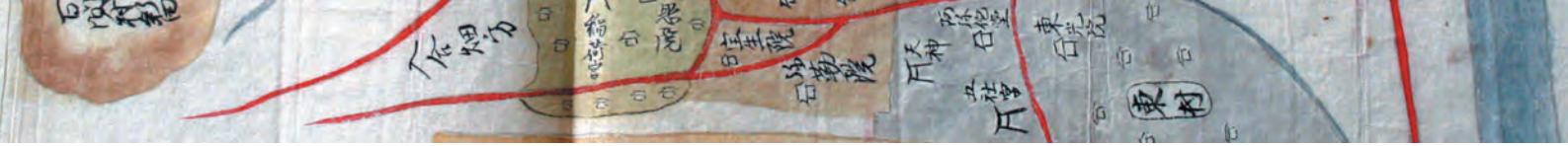
須賀村については、島に須賀村内八左衛門新田、辰新田には須賀村新田が確認できます。寺社は長福寺、金剛寺、真蔵院の他、浅間社、日光權現社、身代社も確認できます。この当時から身代社に池があったことも分かります。金剛寺周辺では水路がコ字状に配置されているため、中世の城館があった可能性もあります。



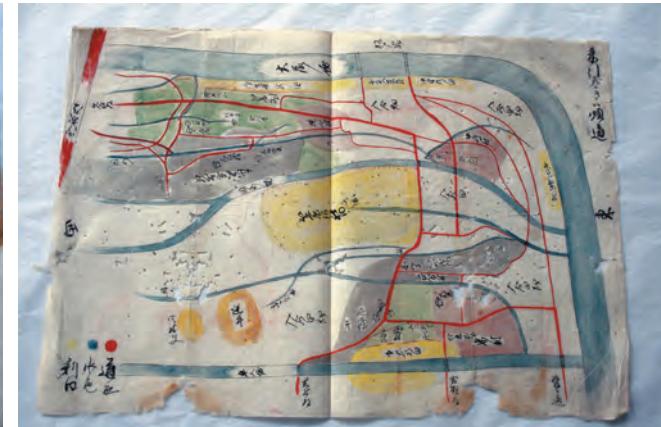
百間村絵図 折原静佑家文書

この百間村絵図は記載されている内容等から寛延2年（1749）から宝暦3年（1753）に作成されたと推定されます。百間村は元禄8年（1695）に百間村と百間東村、百間西村（後の百間中村）、百間中島村の4村に分村し、更に百間村は支配の関係から事実上、百間本村、百間西原組、百間金谷原組の3村に分村します。これらの村の内、この絵図は百間本村の名主宅で発見されました。内容も百間本村を中心と書かれたことが分かります。黄色が百間本村の田地を、灰色が百間本村の畠地及び屋敷地を、赤が道、水色が川・沼、他領との入会地は白で描かれています。池田備中守知行所が百間中村及び百間中島村を、永井十左衛門知行所が百間東村を、松波甚兵衛知行所が百間金谷原組を、森川下総守知行所が百間西原組を示しています。百間本村の土地は源太宿（山崎）や川島、切戸（いずれも百間）にある程度纏っていますが、中須（中島）や西原、姫宮、平島（逆井）、十殿（山崎）等にも飛び地が確認できます。

村絵図は古い情報の上に新しい情報が記載されるため、年代の新しい村絵図の中にも古い情報が残されていることがあります。この絵図にも古い情報が散見できます。この時代笠原沼では既に新田開発が行われ、絵図にも高階伝次郎御支配所笠原沼新田と記載されていますが、そのベースとなる絵は笠原沼時代の沼地が水色で描かれており、沼口の古落堀の様子も分かります。この他、姫宮神社に御林があったことも分かりますが、百間本村と余り関係のなかった西光院付近や古利根川が2本に分流していた中州島（川端）付近については省略されています。



百間村絵図 岩崎俊男家文書



百間村絵図 岩崎俊男家文書

上の左右の絵図はどちらも百間村絵図ですが、右側の絵図には須賀村が含まれています。前述した百間三ヶ村絵図と同様に旗本池田氏により一体的に支配されていたため、本絵図が作成されたと推定されます。しかし、2つの絵図は非常に構成が類似します。中央部に笠原沼新田が所在し、北側から東側に古利根川が流れています。どちらも新田の場所が明確化されており、新田に関係する絵図の可能性もあります。右の絵図で興味深いのは真蔵院と薬師堂が並んで記載されていることです。少なくともこの絵図の作者は真蔵院と薬師堂を別の寺と認識していたと推定されます。左の絵図には西光院付近の寺社が詳しく描かれています。



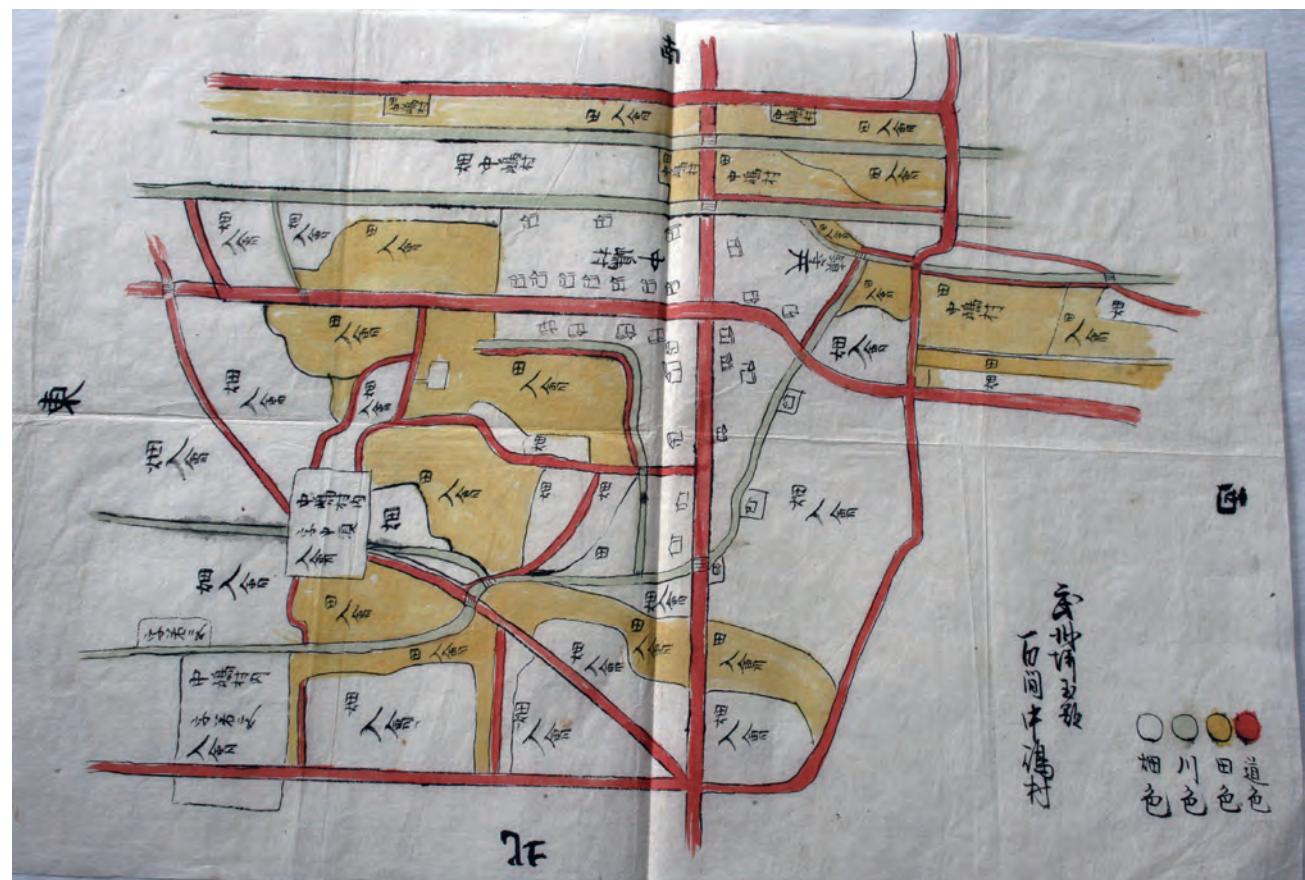
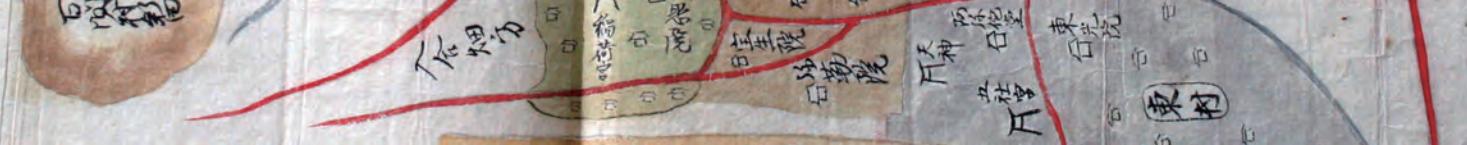
百間村絵図 折原静佑家文書

百間村絵図 折原静佑家文書

左の絵図は南を上にしている百間村絵図です。通常の村絵図のように、百姓屋敷や田畠、耕場を中心とした内容ではありません。御伝馬道、横手圍堤、内郷围堤、大谷作場道、樋口落口等道路や用水施設の名称が細かく記載されることや凡例で水（水色）と道（橙色）、田（白色）のみ描かれることから、水害後の御普請の願書に付属する絵図の可能性が高いと考えています。



右の絵図は北を上にした百間村絵図です。百間本村について非常に詳しく描かれています。百姓屋敷の配置は実際と同じで、名主や組頭を勤めた源太左衛門、清次郎、兵左衛門宅も他家より大きく描かれています。百間本村の田は灰色に畠は白色に塗られていますが、他領については薄茶色で他村色とされることから、百間本村の村絵図と考えられます。



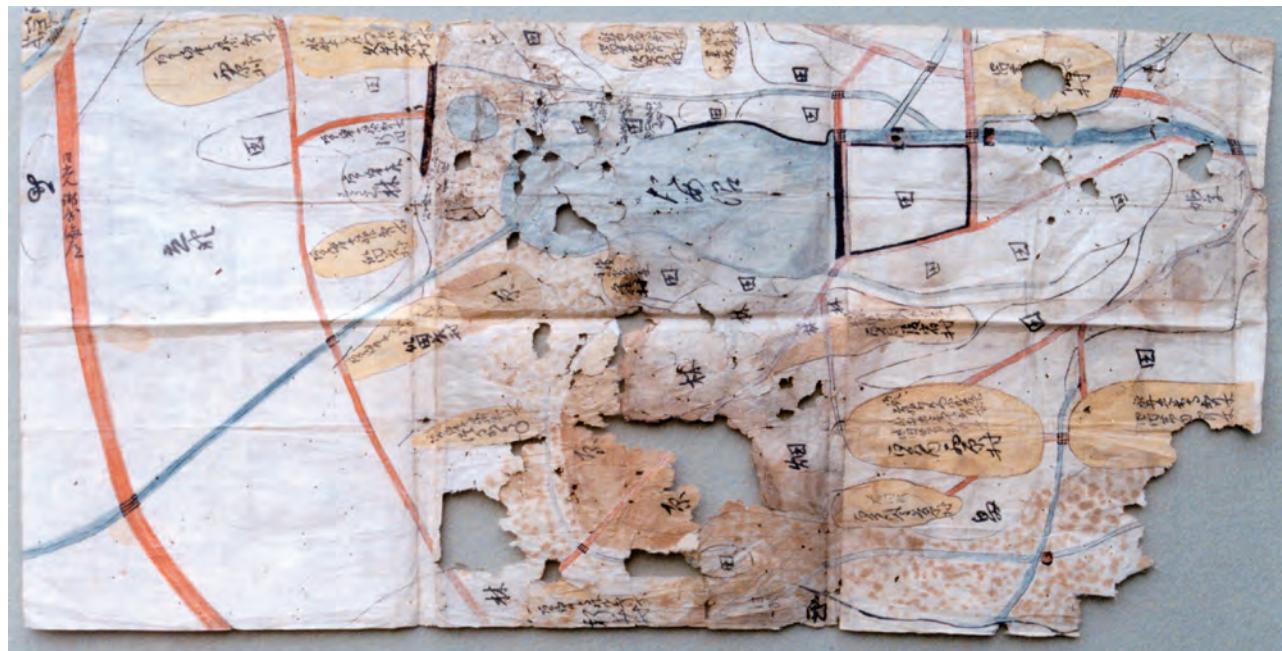
百間中島村絵図 岩崎俊男家文書

上の絵図は百間中島村絵図です。中心地である字道仏については百姓屋敷の家並みも含めやや詳しく描かれていますが、字中須や字若宮の集落は省略されている上、字西原や字山崎、字中州島等の飛び地については描かれてもいません。百間中島村全体を表すため作成された村絵図というより、字道仏に係わる願書等のために作成された村絵図の可能性があると思われます。

百間村絵図 折原静佑家文書

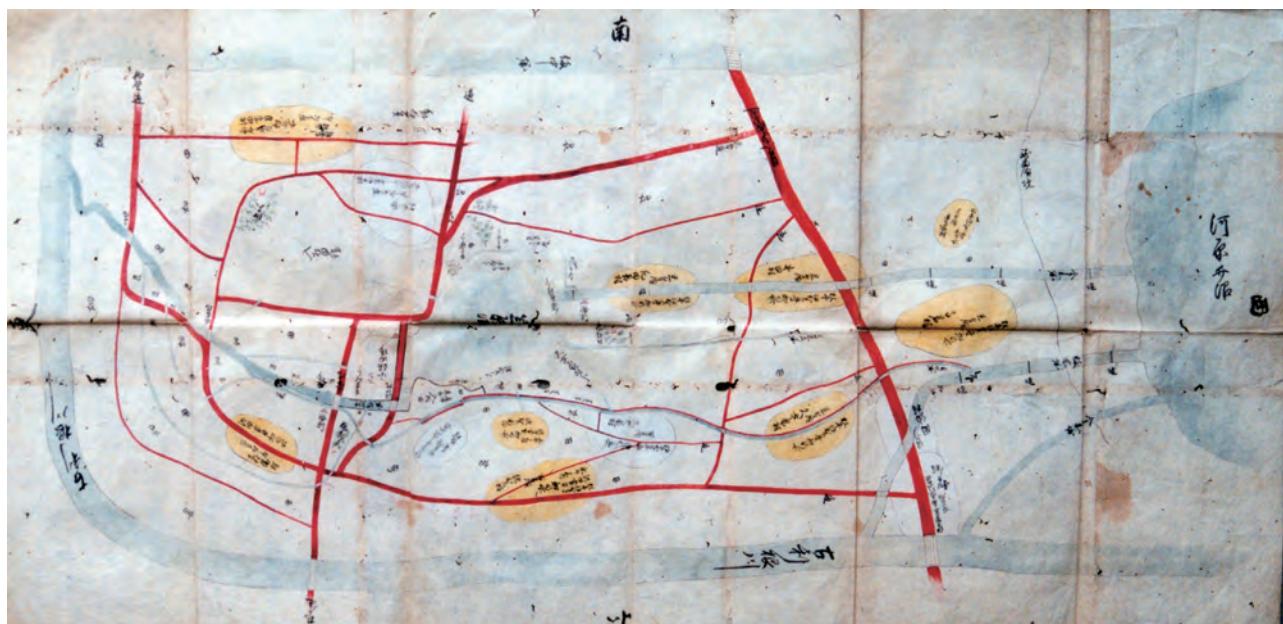
右の絵図は南を上にした百間本村の絵図です。「右は村絵図に少しも相違御座無く候」と記載されています。百間本村について非常に詳しく描かれています。百姓屋敷の配置や飛び地、除地の状況は実際と同じで、省略されているとは言え、この村絵図の正確さが伺えます。名主である源太左衛門宅は源太宿中央部に大きく描かれています。笠原沼は水色で描かれていますが、笠原沼落堀が開削されていることから古い情報がそのまま、残っていたと考えられます。





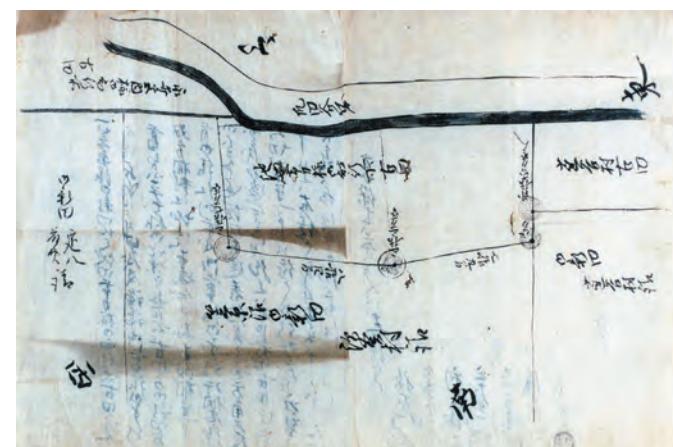
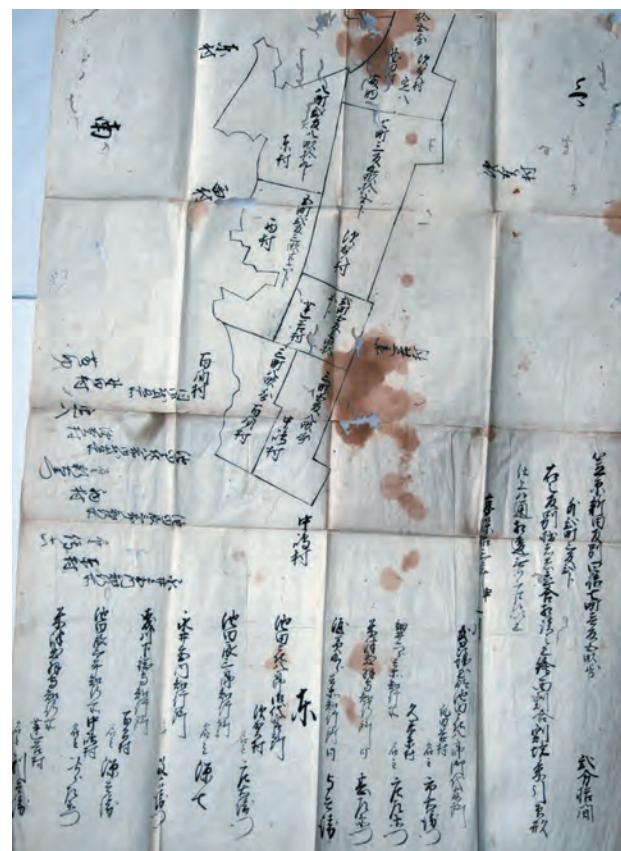
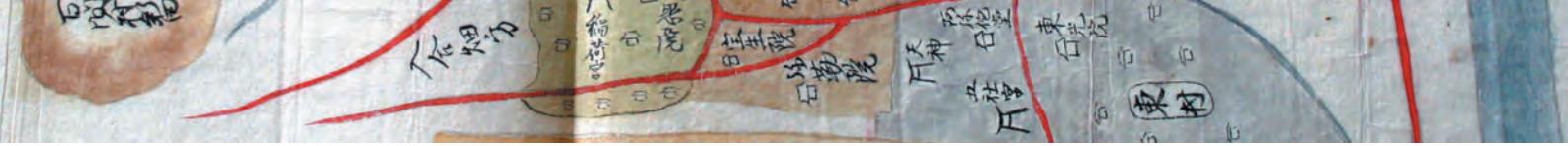
溜沼争論絵図 折原静佑家文書

この絵図は記載される内容等から、万治元年（1658）頃の絵図と推定されます。それは、寛文12年（1672）の裁許状に15年以前に水論がありと記載されているためですが、絵図の情報のみでは、慶安4年（1651）から万治元年（1658）のものと推定されます。用水堰の場所が争論となった場所であるためか穴が開いています。記録に残る最も古い笠原沼をめぐる争論です。



騎西領落堀堰論裁許状絵図 折原静佑家文書

この絵図は元禄6年（1693）に幕府から出された裁許状の絵図です。笠原沼から用水を引いている百間村（西原村・道仏村・西村・東村）と笠原沼周囲の糸原村、須賀村、爪田谷村との水争いは、記録に残るだけでも5・6回程確認されており、幕府からは万治元年（1658）頃、寛文12年（1672）、元禄6年（1693）、享保6年（1721）の4回も裁許状が出ています。しかし、いずれの裁判でも笠原沼や騎西領落堀から用水を引いている百間村が勝訴しています。この他、松平伊賀守知行所の岩槻藩領が多いことが分かります。爪田谷村、高岩村、野田村、寺塚村、久米原村は岩付領と須賀村は百間領と記載されます。岩槻藩領になった時期や須賀村が相給であったことと関係があると推定されます。



笠原沼新田・古田境取極 戸田義一家文書

享保 16 年 (1731) に笠原沼新田と旗本池田氏須賀村の古田とで境争いがあり、普請奉行の検分により境が取極められました。

笠原沼新田割境絵図 戸田義一家文書

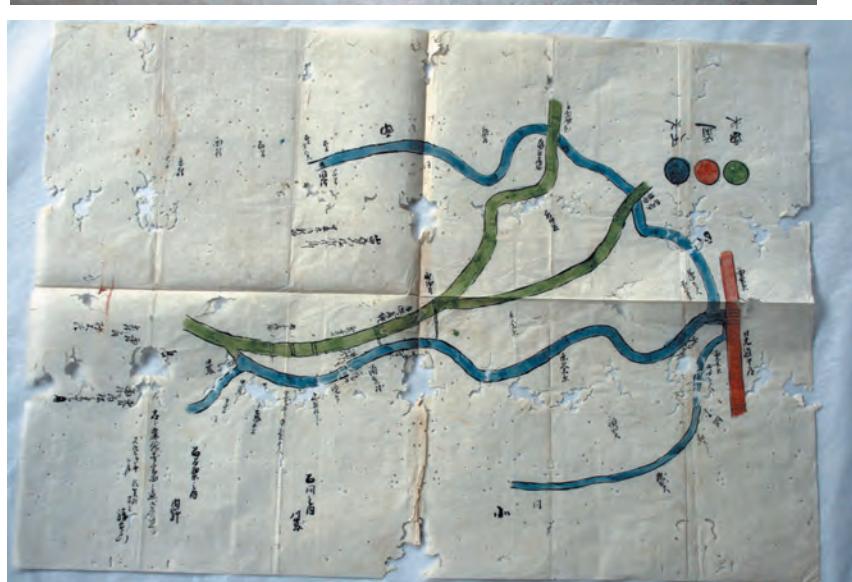
享保 13 年 (1728) 3 月の笠原沼新田の計画図です。百間村、東村、西村、須賀村、中島村、蓮谷村、久米原村、爪田谷村の 8ヶ村と須賀村定八と野田村藤助の 2 名で新田開発が行われました。



大落堀切広御普請願書絵図 (部分)

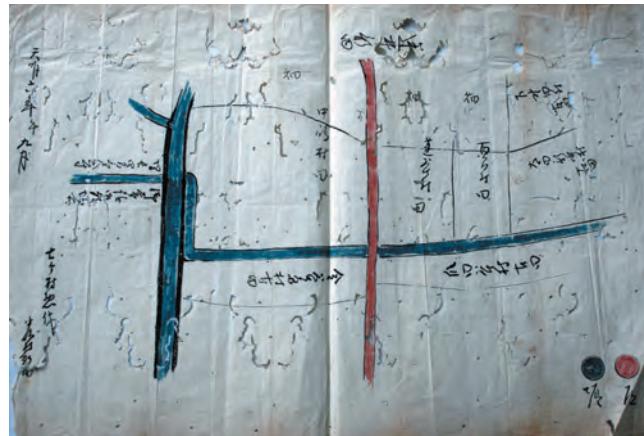
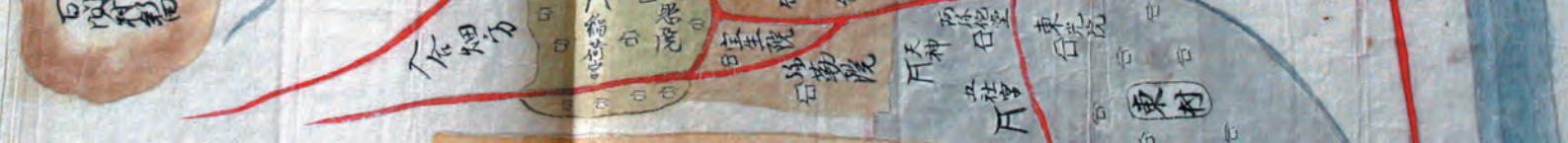
折原静佑家文書

加須や久喜から春日部までの古利根川 (騎西領大落堀) の幅を広げるための願書絵図の一部です。清地橋付近の川幅が 19 間と記載されています。



用悪水絵図 岩崎俊男家文書

緑色が排水、水色が用水を表します。笠原沼代用水の内、西糸原分水から、笠原沼北側用水 (中須用水) が中島関枠まで、笠原沼南側用水 (百間用水) が第六天関枠までが描かれています。笠原沼北側用水からの支水が笠原付回堀に掛渡井を掛けて笠原沼新田北側の古田に水を供給していることが分かります。



第六天埋樋御普請願絵図 岩崎俊男家文書

天明 6 年 (1786) の第六天埋樋の御普請願です。逆井新田落堀に関連する埋樋の御普請を願い出ました。



西条原分水絵図 岩崎俊男家文書

西条原分水に係る争論や普請に伴い作成された絵図と推定されます。



新田絵図 折原静佑家文書

笠原沼、逆井、下ノ谷、百間四ヶ村請、流作場新田が描かれています。黄色が田、灰色が烟です。



笠原沼須賀村新田絵図 岩崎俊男家文書

笠原沼新田の絵図ですが、周囲の古田の支配状況が詳しく記されています。笠原沼須賀村新田の所に御支配所と記されているため、笠原沼須賀村新田の絵図と推定されます。

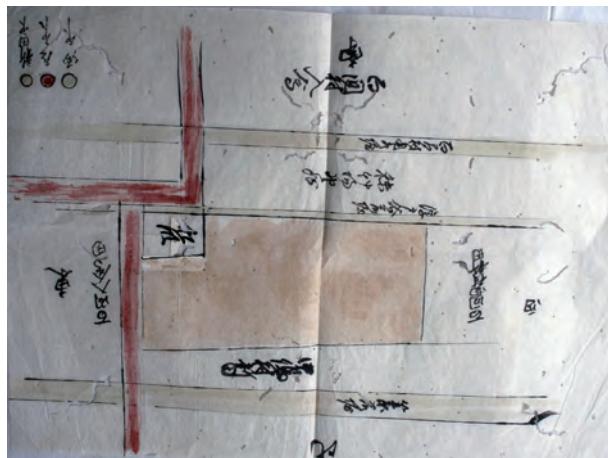


笠原沼新田絵図 岩崎俊男家文書

いずれも笠原沼新田の絵図です。右側の絵図には、「逆井落少々引ホス」と記されています。両方の絵図とも糸原村新田の西側に爪田谷新田ではなく、糸原村私領と記載されています。他の絵図でも時代が下るほど、爪田谷新田が記載されていないものが多いと言えます。

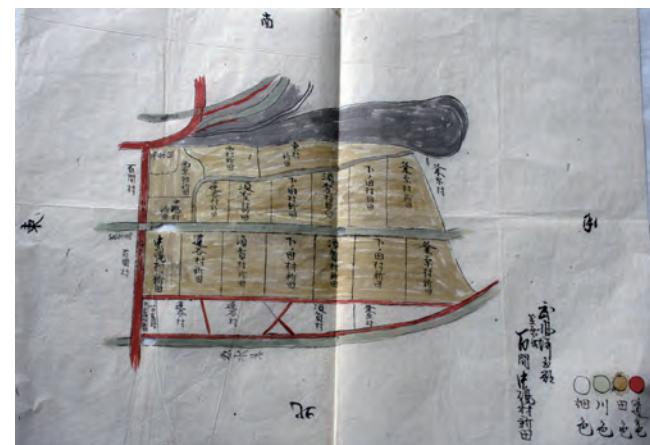


笠原沼新田絵図 岩崎俊男家文書



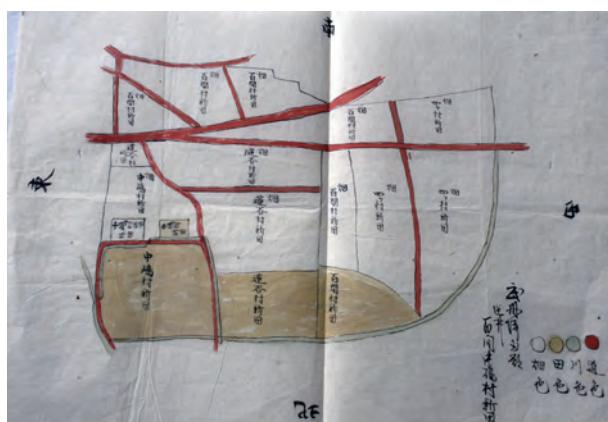
笠原沼百間西原組新田絵図 新井隆夫家文書

笠原沼新田の内、百間西原組新田の範囲のみの絵図です。逆井落堀が浮戸谷落堀と記されています。



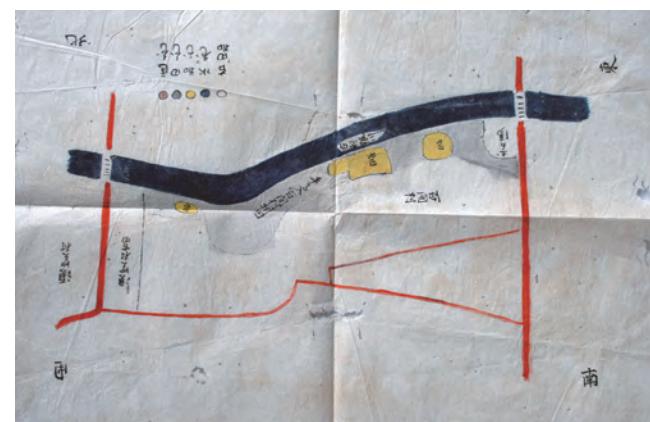
笠原沼百間中島村新田絵図 岩崎俊男家文書

北東側に新田開発以前の笠原沼から姫宮堀への落口の跡が中島村新田と記されています。



逆井百間中島村新田絵図 岩崎俊男家文書

逆井新田は東側から中島村新田、蓮谷村新田、百間村新田があり、その西側に百間四ヶ村請新田がありました。



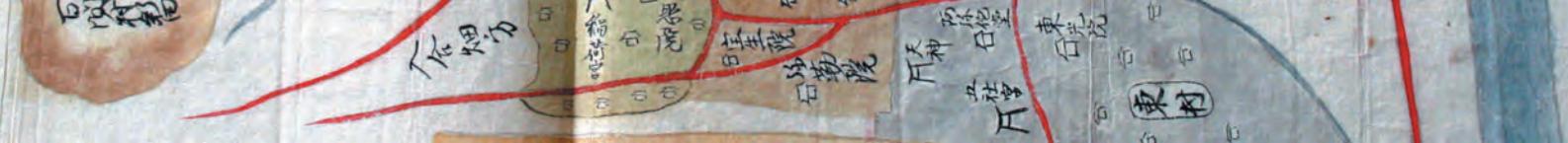
牛高入百間村新田絵図 折原静佑家文書

古利根川の河原橋から清地橋にかけての流作場にあつた新田です。江戸本所の大寿院が新田開発を請け負いました。



百間村西原組金谷原組下ノ谷新田絵図 関根孝吉家文書

下ノ谷新田の内西原組新田と金谷原組新田を描いたものです。白色が新田、薄茶色が古田、小豆色が秣場です。中央部に隼人堀が、西側には海老ヶ島の秣場が確認できます。道の交差する辺りも新田であることが分かります。東側にも秣場があり、西村境と記載されます。



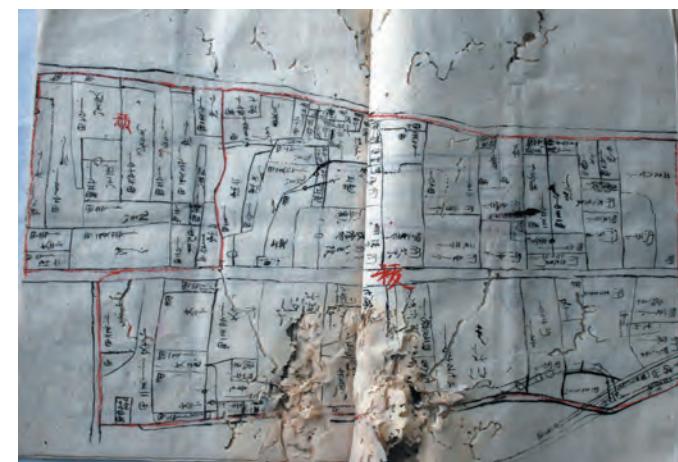
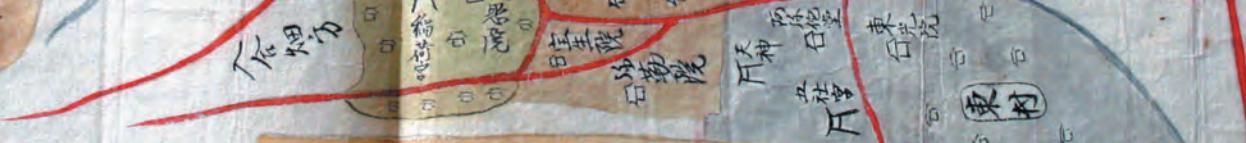
絵図 折原静佑家文書

この絵図は断簡のため詳細は不明ですが、内容等から貞享3年（1686）から元禄2年（1689）に作成された絵図と推定できます。左が断簡の全体を、右が和戸村や須賀村周辺のアップです。騎西領悪水落との記載から溜沼争論絵図のような水論関係絵図の可能性があると推定されます。古利根川が古川と記され、その横に「池田帶刀様御代官所須賀新田」とあることから、この当時、須賀新田は天領であったと推定されます。なお、この須賀新田は八左衛門島新田で後に旗本池田氏の領地となりました。須賀村は岩槻藩領である松平伊賀守知行所、池田帶刀知行所、永井宮内知行所、糸原村（東糸原村）と和戸村は熊沢武兵衛代官所、国納村は八木仁兵衛代官所と記載されています。



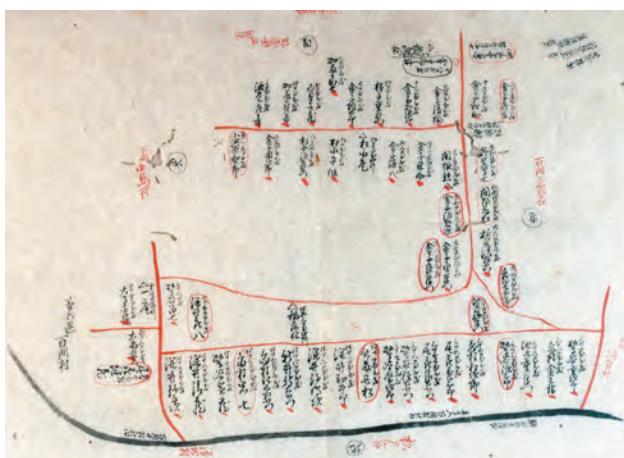
須賀村絵図 戸田義一家文書

この絵図も断簡のため詳細は不明ですが、内容等から相当古い段階の須賀村絵図であることは間違いないと推定されます。左が断簡全体を、右が一部地点のアップです。須賀村の内、東側にあたるものですが、更に東側にも絵図は続いているようです。山林の記載は稻荷神社・浅間神社でしょうか。須賀村中央部から西側については欠損しています。北側の往来海道は久喜道で家が、南側の海道は辰新田の通りで須賀新田家並が記されています。この絵図で特徴的なのは右上（アップ写真）に「杉戸町江舟渡シ」と記されていることです。位置は現在の河原橋にあたります。江戸時代前期には後の河原橋に舟渡し場があったことが分かります。



百間中島村屋敷図 岩崎俊男家文書

左の絵図が道仏地区の屋敷図で上が東です。元和5年(1619)の検地の情報が記載されており、非常に貴重な絵図です。右上には医王院が、中央部には名主であった蔵人(九郎兵衛)の屋敷、その下には一時期名主を勤めた勘ヶ由(次郎左衛門・佐兵衛)の屋敷が描かれています。右の絵図は道仏地区の明細図で、上が南を示します。明治6・7年(1873~74)頃のものです。道路南側に、医王院、清次郎、文次郎、重右衛門、沖右衛門宅が並び、北側に源六、幸七、源七、惣右衛門、九郎兵衛、吉平、吉左衛門宅が並びます。



百間本村宅地図 折原静佑家文書

明治4～7年（1871～74）頃の百間本村の宅地図です。宿と川島・切戸に宅地が集中していることが分かります。



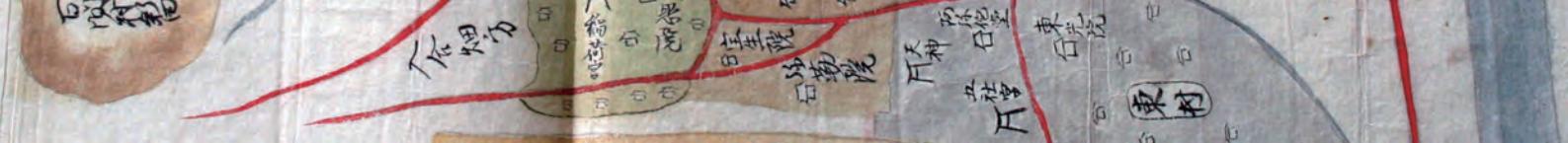
百間下西原組明細図 新井隆夫家文書

明治6・7年（1873～74）頃の百間下西原組の明細図です。下西原組の宅地は赤で記されています。後の百間小学校敷地には惣右衛門宅と新六宅があつたことが分かります。地蔵院斜め前にはクランクがあります。道の北側には良敬、七平宅が、道の南側には六左衛門、又兵衛、平左衛門、仁兵衛、徳右衛門、木左衛門、伊右衛門宅が並んでいました。

和良村明細圖 小島雅郎家文書

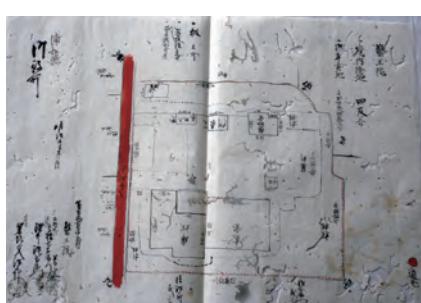


明治6・7年（1873～74）頃の和戸村の明細図です。上が北側を示し、西側の道が御成街道、東側の川が備前堀川です。中央に文殊院がありました。現在の県道春日部久喜線は文殊院の南側を東西に走っています。



日光御成街道絵巻（部分） 埼玉県立歴史と民俗の博物館

寛政・文化期（1789～1818）のものです。上が西糸原、国納付近で、下が和戸、下高野付近です。上の絵図右側に西糸原鷲宮神社が、中央に一橋領境を示す領分杭が描かれています。水路は右から笠原沼代用水、備前堀、姥ヶ谷落、備前前堀、古利根川で、下高野村に一里塚が確認できます。下の絵図右側に和戸浅間神社が、その横に旗本山本氏知行和戸村の名主九右衛門宅前に高札場が、その左側にも旗本榊原氏知行和戸村名主与右衛門宅前に高札場があります。



医王院絵図 岩崎俊男家文書



稻荷神社絵図 岩崎俊男家文書



青蓮院絵図 岩崎俊男家文書



若宮八幡神社絵図 岩崎俊男家文書

この4枚の絵図はいずれも、明治4年（1871）に百間中島村が浦和県に提出したものです。明治新政府により、神社や仏閣について詳細な調査が行われたことが分かります。当時、百間中島村は浦和県第七区に所属していました。

名主岩崎文治郎、組頭深井治郎右衛門、百姓代高橋七右衛門が確認できます。明治4年は江戸時代から続く名主制度最後の年でした。

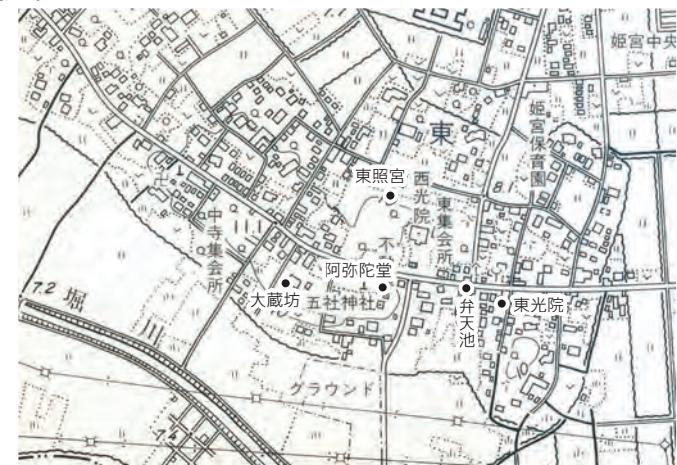
■ 西光院付近の絵図



日光街道分限延絵図（部分）（独）東京国立博物館



西光院復元図



西光院付近の現在の地図

日光街道分限延絵図は江戸時代の西光院の様子がほぼ正確に描かれています。奥の山の頂上に東光院が、その麓に弁天池があり、道を挟んで斜め向かいには門を伴う塀に囲まれた西光院が描かれています。その斜め向かいには五社神社と阿弥陀堂が並んでいました。その左側の山頂に大藏坊が、その手前には不動坊が描かれています。他の絵図にも広照坊、明積坊、池之坊、西光院、阿弥陀堂、五社神社、不動坊、大藏坊等が描かれています。



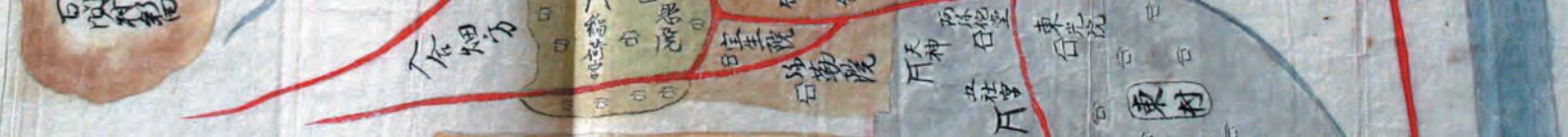
建前図面並坪数等之進上書 西光院文書



百間三ヶ村絵図（部分） 岩崎俊男家文書



百間村絵図（部分） 岩崎俊男家文書



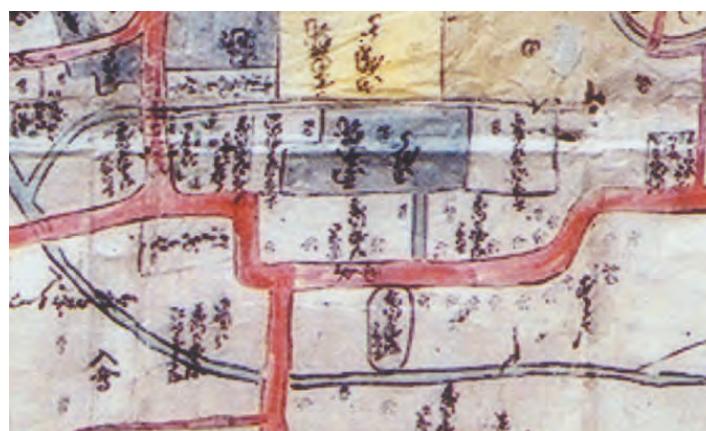
百間西原付近の絵図



西原付近の現在の地図



百間三ヶ村絵図（部分） 岩崎俊男家文書



百間村絵図（部分） 折原静佑家文書

左は西原地区の絵図です。西側に青林寺があり、その東側に百間中島村新屋敷があります。左下の絵図も西原地区ですが、東西両端にクランク（枡形）が確認できます。上の地図にも東西両端のクランクが認められます。

西原地区はこのように両端がクランクで囲まれた範囲に所在します。クランクは城下町や宿場町に多く見られます。このため、西原地区は戦国時代から続く宿場町や城郭・陣屋の城下町であったと推定されます。

ちなみに、西原新屋敷の東側一体からは、戦国時代から江戸時代初頭の堀や掘立柱建物跡、方形堅穴遺構、土壙跡等の遺構や中国産の青磁、白磁、染付、瀬戸美濃産や肥前産、常滑産、志戸呂産の陶器、在地系のカワラケ、擂鉢、捏鉢、焙烙、内耳土鍋等が出土しています。

『新編武藏国風土記稿』や「百間史料」によるとこの辺りに百間郷の領主旗本服部権太夫政季・政信父子の屋敷があったと伝えられていることから、服部氏の百間陣屋があった場所と推定されます。

■川端（中州島）付近の絵図



川端付近の現在の地図



百間三ヶ村絵図（部分） 岩崎俊男家文書

古利根川は江戸時代中期まで左下の絵図（百間三ヶ村絵図）のように、川端付近で東西2筋に分かれています。そして、その中央に位置する字中州島は、東西2筋の古利根川の間の中州に集落が営まれたため付けられた地名と推定されます。

下の絵図（古利根川西筋開発取極絵図）は延享2年（1745）のもので、古利根川西筋

を廃して、新たに元の河川部分を新田開発する取り決めです。この廃川は百間東村と百間中島村の2村が開発することになりました。しかし、姫宮堀以南は姫宮堀の下流として利用され続けることになりました。姫宮堀は、近代の河川改修により直線化されました。

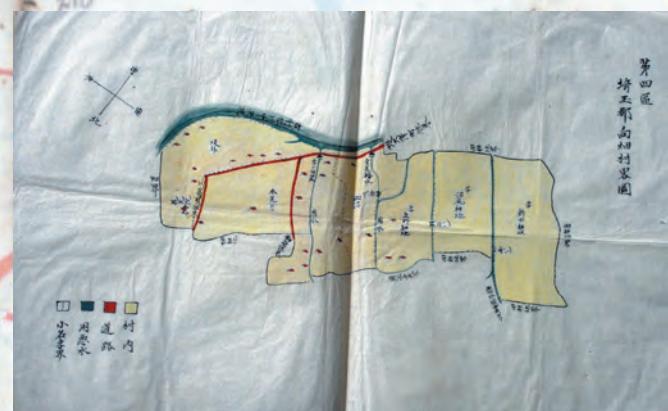
この古利根川西筋は現在の宮東グラウンドの南側から川端公民館の南側を通り、県道春日部久喜線とほぼ同じ位置を流れています。そして、古利根川東筋との合流地点は現在の川端集会所北側に位置しました。



古利根川西筋開発取極絵図 岩崎俊男家文書



下赤岩村略図 関根孝吉家文書



向畠村略図 関根孝吉家文書



大島村絵図 関根孝吉家文書



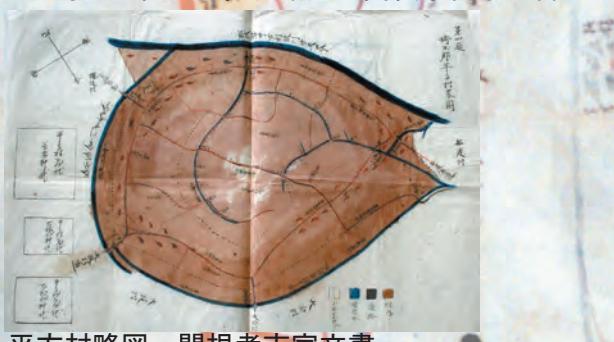
船渡村略図 関根孝吉家文書



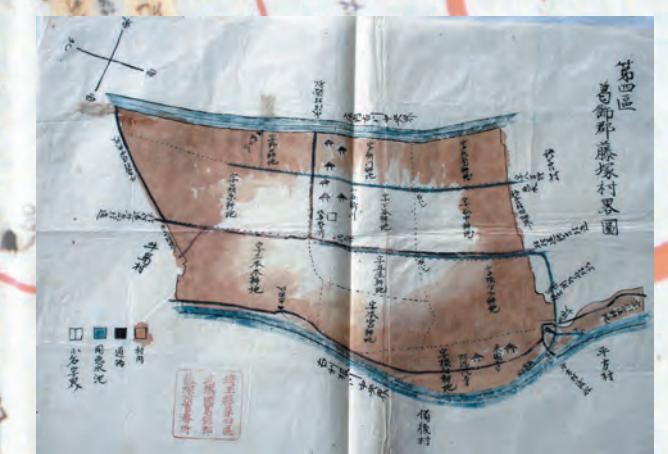
川崎・大杉・大松村略図 関根孝吉家文書



樋籠・新川村略図 関根孝吉家文書



平方村略図 関根孝吉家文書



藤塚村略図 関根孝吉家文書

発行 宮代町郷土資料館

住所 南埼玉郡宮代町字西原 289

TEL 0480-34-8882

FAX 0480-32-5601

<http://www.town.miyashiro.saitama.jp>